

男性アイドルの関係性に「友情」を求める女性たち

—台湾におけるジャニーズ・ファンを事例として—

Johnny's Idol Groups as Icon of Friendship: A case study on Johnny's female fans in Taiwan

陳 怡禎*

IChen Chen

1. はじめに

本稿は、台湾における二〇代～三〇代女性ジャニーズ・ファンをインタビューした結果に基づき、女性ジャニーズ・ファンが、「ジャニーズ」という趣味をきっかけにして構築する関係性について分析する。特に、女性ファン達が日常的にジャニーズ・アイドルを消費する際

に、どのように「男性」アイドルを媒介としてファン・コミュニティへと結束し、その中でいかなる「友情像」をイメージし、それに重ね合わされるかたちで彼女たち自らの価値観を見出しているかを検討する。

2. 先行研究

Fabienne Darling-wolf (2003) はSMAP、特に木村拓哉が女性に歓迎された理由について分析した際に、木村が魅力的と映った一つの理由として挙げられるのが、グループとしての男性同士の友情であるという。Darling-wolfの観察によると、バラエティ番組で一緒になって挑戦したり、お互いに悪気のない悪戯をしたりするSMAPメンバーの行為は、メディアを通じて、堅く結ばれたグループというイメージを伝えることになる。この時SMAPの仲の良さの原因は、「彼らは青少年時代からの仲間であ

るため」と説明される。こうした「仲間」メッセージは、SMAPの事例に限らず、グループとしてファンに提示されることが多い他のジャニーズ・アイドルについても、常に読み取られる可能性があると言えるだろう。このような仲間メッセージを、ファンとしての女性たちはどのように読み取っているのか、さらにいうと、なぜ女性ファン達は、アイドル個人ではなく、グループの「関係性」に注目し、そこから仲間メッセージを受け取っているのかという点は、本研究にとって重要な焦点となる。この点を明

*東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：ジャニーズ・ファン、ジャニーズ・アイドル、女性友情、台湾

らかにするため、以下では、女性ファンが経験する様々な「関係性」を検討しながら、本稿の位置づけを明らかにする。また、本稿が台湾に

おける二〇代～三〇代女性ジャニーズ・ファンを研究対象にした理由も説明する。

2.1 女性ファンが経験する「関係性」に関する先行研究

まず、ジャニーズ・ファンによる関係性消費については、辻（2007、2012）の研究がある。辻は、日本のジャニーズ・ファンの文化において「関係性の快楽」が大きな割合を占めていると指摘している。九〇年代のジャニーズ・ファンに対する辻（2007）の調査において、ファン達が「自分（＝ファン）とアイドルの関係」に重点を置いていることが分かった。ファン同士との関係性については、彼女達にとって必要なのは、自分とアイドルとの関係を邪魔せず、ただ満足感のみを仲良く共有できる仲間だけなのである。このような同担¹回避現象が未だにも一部のファンの中に存在することを否認できないが、その一方、辻は、現在にはジャニーズ・ファン文化にある変容が見られたと指摘している。すなわち「2.5次元の疑似恋愛関係の「当事者」から、アイドル同士の関係性の「観察者」に遷り変わったということであり、いわばディープな「当事者」として深く関わるのではなく、むしろ一定の距離を保った「観察者」としてゆるやかにかわりつつ、同士にファン同士でも『空気を讀んだ』コミュニケーションを円滑に保持しつつけるような現象²が見られる」（2012:28）のである。また、辻が指摘した、ジャニーズ・ファンが「観察者」として、アイドル同士の関係性を楽しむ点について、吉澤（2012）とNagaike（2012）も論じている。Nagaikeは、ジャニーズ・アイドルが女

性ファンに歓迎される理由について、「グループ」性は不可欠だと指摘している。なぜならば、ファン達がアイドル同士の様々な関係性を想像して語ることを欲望しているためである。つまり、女性ファンはジャニーズ・アイドルを消費する際に、ファン同士の関係性が円滑に保たれることを大事にしながら、アイドル同士の関係性にも焦点を当て、快楽を獲得するといえよう。

また、対象は異なるが、「宝塚」のファン文化研究も参照したい。「宝塚」と本研究でとりわけ注目したい「ジャニーズ・アイドル」のファン文化で共通するのは、担い手の殆どを女性が占めている点や、日本発の現象で世界中に広まっている点である。実際、宝塚ファン・コミュニティとジャニーズ・ファン・コミュニティは、様々な点で対応している。

宮本（2011）は宝塚のファンクラブに注目し、ファンの集団性を論じている。吉本は、集団内部にも、ファン歴、チケット購入、業務参加といった「貢献度」がファンの序列を決定することを指摘している。こうした階層性について、龐（2010）の台湾におけるジャニーズ・ファンの中に存在するヒエラルキーに対する考察にも見ることができる。一方、ファン・コミュニティの間にも序列がある。宮本によれば、宝塚の生徒たちはトップスターを頂点とするピラミッドの構造のなかにおり、また学年・

成績順という序列に従っている。そして、その生徒についているファンクラブも、生徒の序列に従って動いている。すなわち、女性が主体である宝塚ファン達が、スター同士の関係性を鏡のようにファン同士の関係性に投射しているともいえるだろう。宮本が指摘しているスター同士の関係性とファン同士の関係性との対応関係は、前述の辻（2012）の現在のジャニーズ・ファンに対する研究にも見られる。辻は、嵐というジャニーズ・アイドル・グループを例として、ジャニーズ・アイドル同士の「仲の良さ」が、ファン仲間の円滑なコミュニケーションとちょうど写し鏡のように対応していると指摘している。

これまでで取り上げたジャニーズ・ファンや宝塚ファンが経験する「関係性」の先行研究は、ファン達は、「アイドル（スター）同士の関係性」や「ファン同士の関係性」に注目することが明らかにした。しかしながら、なぜ女性ファン同士は、アイドル（スター）同士や自らファン同士に、同性同士の関係性に重点を置くのか。この点を解明するため、上記の点に続いて、女性同士のホモソーシャル関係性に関する先行研究を検討する。

従来、女性同士の関係性についての論述は、男性の存在が必然的に前提となっている（Berry & Traeder 1995=1997;今田 2007）。すなわち、女性同士のホモソーシャル関係性は、男性との異性愛関係の影響を全く排除できるわけではない。またその一方で、男同士の絆、友情という男性のホモソーシャルな関係性は社会秩序の中で居場所が与えられているのに対し、女同士の間には存在するホモソーシャルな

関係性は不可視化されているという指摘もある（東 2009;高井 2009）。このような女同士の関係性は男性との異性愛関係性にも、男性のホモソーシャルな関係性にも劣るものとして位置づけられる社会環境の下に、女性は様々なかたちで、同性同士のホモソーシャルリティを欲求すると考えられる。例えば、東（2007）は、宝塚ファンを考察し、宝塚ファンが自分（＝ファン）とスターの関係性、劇団員同士の関係性や自らファン同士の関係性という、実際に殆ど女性で構成される三種の関係性に、女性同士の絆を見出していると分析している。さらに、東は、ファン達が宝塚のスター達を通し、「オン」としての舞台上で上演される異性愛や男同士の絆と、「オフ」としての舞台裏で存在する劇団員同士の絆が相互に投影されるという。加えて、「オン」と「オフ」の関係性が重ね合わされることによって、ファン達は舞台上に上演される物語をより楽しめると、指摘している。だが、このような女性同士の絆というのは、実際、宝塚ファンが女性劇団員同士に演じられる異性愛や男同士の友情といった物語を通じて見いだしているものである。すなわち、女性ファン達は屈折的に、女性同士の絆を舞台上に演じられた異性愛や男同士の友情に重ねて捉えていると考えられる。

しかしながら、本稿でとりわけ注目する女性ジャニーズ・ファンは、東が分析する宝塚ファンのように、舞台上の異性愛物語を通じて女性のホモソーシャルな関係性を見いだすのとはやや異なると思われる。すなわち、ジャニーズ・ファンが欲求するホモソーシャルな関係性は、異性愛モデルに依拠して想像するのではなく、

社会的にも是認されている男性同士の友情をモデルにすることで、男性のホモソーシャルな関係性に自らの理想を投射していると言えよう。

2.2 研究対象に関して

本稿が、台湾における二〇代～三〇代女性ジャニーズ・ファンを研究対象にする理由は以下の通りである。

台湾はジャニーズ事務所に、南アジアや中国市場に入る「踏み板」と見なされており（李2006）、ジャニーズ事務所の海外戦略方針のなかに重要な位置を占め、最初の海外拠点の一つとなっている。また、今回の調査対象となる台湾のジャニーズ・ファンは、その殆どが、学生時代にはじめてジャニーズ情報に接触しているが、時期的に言えば、それはジャニーズブームが始まったばかりの九〇年代半ば頃となる。次章でも論じるが、当時、日本の番組とアイドル誌など様々な情報が大量的に流通していたため、台湾のジャニーズ・ファンにとっては、日本との物理的距離や時間差という点が問題とならず、殆ど同様のアイドル情報を手に入れられたのである。このような条件も、台湾におけるジャニーズ・ファン達によるジャニーズ文化の消費のありように対し、大きな影響を与えていると考えられる。すなわち、長期に渡るファン歴を持つ台湾のジャニーズ・ファンは、単に傍観者として海外のアイドルを愛好したというばかりではなく、むしろ、殆ど時差がない、大量な情報によって、アイドル同士の関係性やその「擬似的」な成長にインサイダーとして「近い位置」から参入している感覚を持っていると考えられるのである。その一方で、彼女達が情報

以下、本稿では、女性ファンは男性アイドル同士の関係性にどのような「友情」のかたちを読み取っているかに、注目していきたい。

の入手や交換を強く意識しているため、普段から様々なファン活動を通じて、強固なファン・コミュニティを構築しているという指摘がある（龐2010）。その理由は、実際、彼女達は台湾という遠隔地にいるというものであった。こうした点を考えてみると、台湾のジャニーズ・ファンに最も顕著な特徴は、日本のジャニーズ・ファン感覚や海外ジャニーズ・ファン感覚を二重に持つことであるといえよう。

前節で取り上げた女性ファンが経験する「関係性」に関する先行研究は、主に日本人を対象にしている。しかしながら、日本のファン感覚や海外のファン感覚を二重に持つ台湾のジャニーズ・ファンにもある程度適用可能ではないかと考えられる。言い換えれば、本稿は、台湾におけるジャニーズ・ファンもアイドル同士の関係性に注目し、積極的に意味を読み取っているのではないかと考えている。その一方で、「いま、ここにいないジャニーズ・アイドル（龐2010）」をめぐる台湾のジャニーズ・ファンが、海外のファン感覚を持っているからこそ、普段から様々なファン・コミュニティを結成し、積極的にファン・コミュニケーションを行うため、日本のジャニーズ・ファン・コミュニティよりも、強い凝集性を持っていることも考えられる。

以上の点から、本稿はよって、このような日本とアジアのジャニーズ文化消費の架け橋とな

る台湾における二〇代～三〇代女性ジャニーズ・ファンを分析することを通じ、台湾女性ファンの状況だけではなく、より広い視野で、

日本を含めて、アジアという地域共通のジャニーズ・ファン・カルチャーの一端を掴むことが期待できるだろう。

表1 インフォーマントのプロフィール

番号	グループ	年齢	職業	ファン歴
1	A	三〇代前半	中学校教師	九〇年代後半
2	A	三〇代前半	中学校教師	九〇年代後半
3	A	二〇代後半	IT会社事務職	九〇年代後半
4	A	二〇代後半	銀行事務職	九〇年代後半
5	B	二〇代後半	大学院生	二〇〇〇年代前半
6	B	三〇代前半	サービス業	二〇〇〇年代前半
7	C	二〇代後半	中学校教師	九〇年代後半
8	C	二〇代後半	事務職	九〇年代後半
9	D	三〇代前半	雑誌社編集	二〇〇〇年代前半
10	D	三〇代前半	事務職	九〇年代後半
11	D	三〇代後半	事務職	二〇〇〇年代前半
12	E	二〇代後半	銀行カスタマー・サービス職	二〇〇〇年代後半
13	E	二〇代前半	事務職	二〇〇〇年代後半

3. 背景

本稿は、まず台湾におけるジャニーズブームの背景を紹介し、文化資本としてのジャニーズ・アイドルがどのような形で台湾社会に浸透してきたか概観する。その上で、二〇一〇年の五月から八月にかけて、台湾在住の二〇代～三〇代女性のジャニーズ・ファンから成る五つのグループ（総計十三名³）を対象に実施したインタビューの内容を検討する。

まず、問題の設計やインタビュー対象の選定手続きについて、説明しておく。筆者が最初接触したのは、「PTT⁴」という台湾最大のインターネット掲示板で「嵐」板の元管理人だった。その後、二〇一〇年五月に、この元管理人を含め、普段よく付き合っている四人のジャニーズ・ファンの紹介を受け、彼女達の普段の

ファン会に参加させてもらい、グループAとしてグループインタビューを行った。その後、この四人から一人ずつ、ほかの知り合いのジャニーズ・ファンを紹介してもらい、二〇一〇年八月にグループB、C、D、Eにインタビューを行った。

インタビューの内容は主に(1)文化消費面(2)ファン同士との付き合い方(3)ジャニーズ・アイドルへの見方(4)ファン以外の人間関係といった四つの主題に分類する。このような四つの主題を通して、インフォーマント達の生活背景や、ライフコースによってジャニーズ文化消費の変化を明らかにしながら、彼女達が自ら構築しているファン同士の関係性や、ジャニーズ・アイドルに投影された価値観、アイドル同士の関係

性に対する欲求を考察した。その上で、本稿はとりわけ「ファンに求められるジャニーズ・アイドル同士の関係性」に注目し、女性はそのよ

うに男性アイドル同士の関係性を「友情」として捉え、その成立を実感することで快樂を享受するかを主に検討したい。

3.1 台湾におけるジャニーズブーム

まず、台湾におけるジャニーズブームの経緯を明確にしておこう。台湾におけるジャニーズブームの興隆は、九〇年代半ば以降のことであるが、「アイドル消費文化」は、既に八〇年代から九〇年代にかけて台湾社会に浸透していた。特に九〇年代初頭の、日本のジャニーズ・アイドル「少年隊」を真似した台湾人男性アイドル・グループ「小虎隊⁵」の登場は、直後のジャニーズブームに大きく貢献したと見られている⁶。

九〇年代初頭の「日本式台湾人アイドル」の流行を経て、九〇年代の末頃から、ジャニーズ事務所は正式に台湾に進出した。すでにアンダーグラウンドで人気を集めるようになってから数年後のジャニーズ・アイドルの上陸によって、台湾での日本人アイドルブームはいっそう高まった。更に、二〇〇〇年には、KinKi Kidsが、ジャニーズ事務所の台湾進出以来、所属アイドルとして初の台湾コンサートを開催し、同時にアイドル・グッズを販売したことから、日本の芸能人としては前例のないほど人気を集めるようになった以降、ジャニーズ・アイドル・グループが、ほぼ年一回から二回の高い頻度で来台している。

一方、二〇〇〇年以降になると、台湾のファ

ンは、コンサートや関連グッズばかりでなく、テレビ番組や雑誌記事などその他の様々な情報を手に入れることもできるようになった。このように、日本との時間差はあるものの、ジャニーズの情報を入手しやすい環境が用意されたことが、台湾でジャニーズ・ファンを増加させる重要な要因となったと考えられる。更にジャニーズ事務所初の海外公式ファンクラブの開設は、台湾のジャニーズ・ファンにとって、ほかの国と比べても優位な立場に立っていると感じられる効果もあったと考えられる。上記のように様々な情報流通の変化によって、台湾におけるジャニーズ・アイドルの人気をさらに高まり、衰えしらずとなった。そしてこの頃から、台湾のジャニーズ・ファンが自分自身は海外にいながら、常にジャニーズ・アイドルの情報を手に入れたいと強く意識するようになったと考えられる。

ここまで、ジャニーズブームが、どのようなかたちで台湾社会に浸透してきたかを概観した。こうした経緯を踏まえた上で、次節では、今回、本稿が実施したグループインタビューの対象者、台湾の二〇代～三〇代の女性ファンを取り巻く社会背景について、予め確認しておこう。

3.2 台湾女性の現況

二〇〇〇年以降の台湾社会は、都市化の進展につれて社会環境が多文化化し、それに伴い女性を取り巻く社会環境もより開放的なものとなっている。台湾行政院主計処の統計によれば、二五歳から三四歳の女性の未婚率は一九七六年の十四%から、九十年の三割を経て、二〇一二年には四七%にまで大幅に上昇してきた。一方、教育機会に関しても、台湾行政院主計処二〇一二年の調査によれば、二〇歳～三四歳の年齢層で、大学以上の高等教育の学歴を持っている者の比率も、女性が五七%に対して、男性が五四%で、前者が後者を上回っている⁷。また就業状況を見ても、二〇一二年の調査によれば、二五歳から三四歳女性の就業率は七割に近い。以上の調査からみれば、台湾女性が現在享受している教育や就業の機会は、男性とほぼ平等的な状況であり、アジア諸国に比べても相対的に優位な方に入ると言えよう⁸。言い換えれば、現在の台湾女性は、従来の台湾伝統社会で期待された「家庭のために生きる」、「賢妻良母」の女性イメージとはすでに異なっており、教育水準の上昇とともに、社会という場で様々な文化実践を行い、経済的・社会関係や文化資

本などの諸資本を保持しながら、自分のライフスタイルを構築していく存在になってきていると考えられる。こうした女性たちの文化実践を扱った先行研究に、河津(2009)が行った『Sex And The City』のホワイトカラー女性視聴者に対するエスノグラフィがある。河津は、都市における有職の（主にホワイトカラー）という、社会空間のなか、経済力や雇用状態は比較的に恵まれている女性を分析の対象としている。彼女達は、『Sex And The City』という海外ドラマへの視聴をきっかけに、語学勉強、海外旅行などの文化実践に力を投入し、「自律した私」を構築していく。彼の話を用いるならば、「未婚で有職の彼女たちの過ごしている時間は特有の濃密さを内包しているように見えるし、その濃密さは他の境遇の者からは想像しにくい部分でもある」とされる(2009:16)。このような日本の事例を参照しつつ、台湾における二〇代～三〇代未婚で有職の女性ファンが、どのように「ジャニーズ」について濃密的に語り、そのなかからどのような価値観を見出すかを考察することが、本稿の主たる課題となる。

4. 求められるジャニーズ・アイドルの友情像

本章は、女性ファンにとって、ジャニーズ・アイドルという文化的表象にどのような価値観を見出しているかを検討する。特に本稿は、「友情」というコードに注目し、女性ジャー

ズ・ファンたちは、どのようにジャニーズ・アイドル同士の関係性に「友情」というイメージを読み取っているか、その友情のイメージはどのような型になるのか、を明らかにする。

4.1 アイドル同士の友情関係

先行研究のDarling-wolfのSMAPに対する分析で、SMAPというグループの仲の良さの原因は「彼らが青少年時代からの仲間であるため」、と説明される。こうした指摘は、SMAPに限らず、ジャニーズ・アイドル同士の「関係性」が、公私の別を曖昧化しながら、純粋なものとしてファンに受け取られる原因の一つを言い当てていると考えられる。すなわち、ファン達にとっては、事務所によって結成されたグループといった、本来は芸能活動上の公的な「オン」の関係の枠組みが、かなり曖昧なかたちで私的な「オフ」の関係性とも、当然のように重ね合わされて理解されている。さらに、このような関係性が長期に渡る観察・愛好の対象となると、それは、実態にも関わらず、純粋な「友情」に似た関係として解釈されやすくなるのである。実際、インタビューの中からも、こうした事務所制度の下に築かれた友愛関係はジャニーズ・アイドルの特有な魅力の一つだ

と指摘されている。

事務所全体として仲がいいと思う。先輩・後輩関係もある。プライベートでも一緒に出かける仲だと信じている。こういう先輩後輩の制度がいい、台湾の男性アイドル・グループは仲がいいと思えない。(番号⑬、グループE、二〇代前半、山下智久担当)

しかしながら、ここでさらに問わなければならないのは、このイメージされた友愛関係の中に、ファン達がどのような価値観を読み取っているかという点である。以下、本稿はインタビューの結果に基づき、「歴史的蓄積性」や「グループの不変性」という二つの特徴に注目することで、ジャニーズ・ファンがジャニーズ・アイドル同士の関係性に欲求している長年かつ不変の理想的な関係性＝友愛関係を明らかにする。

4.2 歴史的蓄積性：関係性の網の目としてのジャニーズ事務所

ジャニーズ事務所のアイドルには、CDデビューする前に、まだ正式なファンクラブを持たず、具体的にどのグループに所属することもなく、長期間の研修が課される。こうした研修生の時期には、彼らはジャニーズJr.と総称され、主としてCDデビューした先輩グループのバックダンサーを務める。しかし、正式に所属グループを持たないとはいえ、実際、ジャニーズJr.のメンバーは、非公式ながらも、特定のユニットとしてファンの前に登場する場合が殆どである。

台湾においては、NHKや日本番組の専門チャンネルで日本ドラマやバラエティ番組が数多く放映されるようになっているため、台湾のファンの間でも、正式にCDデビューしたアイドルばかりでなく、ジャニーズJr.の存在も認識され、人気を集めることになった。さらに言えば、日本でのジャニーズJr.に対する注目は九〇年代に始まっているが、台湾のジャニーズブームもちょうどこの時期からであった。また、今回インタビューを依頼したインフォーマント達は、大半は九〇年代後半からのジャニー

ズ・ファンである。そのため、実際、「ジャニーズJr.」システムのような長期間に渡る研修制度によって生み出される、歴史的蓄積の感覚が、台湾の二〇代～三〇代女性ファン達がジャニーズ・アイドルの関係性を消費する上で、重要な働きをしていることが推測される。

彼らは小さい頃からずっと一緒にいるから、競争意識があるかもしれないが、一緒にそんなに長い時間を過ごしているから、絆があると思う。ケンカしても、競争しても仲間は変わらない。(番号⑩、グループE、二〇代後半、KAT-TUN担当)

上記の発言から伺われるように、ジャニーズ・アイドル同士が長年に一緒にいることが、ジャニーズ・ファンによって「競争」、「ケンカ」などのネガティブな性格が濾過され、単純化され、「仲良し」と等価なものとして、そこから「仲間」メッセージが読み取られていると言えよう。また、ここでとりわけ注目しなければならない点は、「ジャニーズJr.」という制度の下に、デビュー前の男の子達が、同じユニットとして先輩達のバックダンサーを務

4.3 グループの不変性：かけがえのない関係性への重視

前述のように、「ジャニーズJr.」という制度は、台湾における二〇代～三〇代の女性ジャニーズ・ファンがアイドル同士の関係性を消費する際に重要な働きをしている。この制度から生じる歴史的蓄積の感覚によって、ファン達にとっては、アイドル同士の緊密な関係性が切り離されることは受け入れ難いこととなっている

めたり、時期ごとにユニットを結成したり、或は正式なユニットを結成しなくても常に一緒にマスメディアの前に登場したりしていることである。そのため、女性ファン達がジャニーズ・アイドルの関係性を消費する際に、重要な働きをしている歴史的蓄積の感覚は、実際、「長年に一緒にいる」特定なグループのアイドルメンバー同士の関係性に限定されるのではなく、ジャニーズ事務所全体の繋がりに向けられているのである。グループインタビューの際にも、彼女達は自ら担当するグループだけではなく、他のグループとの交流も話題としているような発言を筆者は度々耳にした。このように、ファン達は事務所全体の関係性のネットワークを想像し、自らの想像力に沿ってアイドル同士の相関図を描こうとしていることで、彼女達がジャニーズ・アイドルに投射している理想な関係性の構図の一端が浮き彫りになると考えられる。すなわち、ここで明らかになったのは、ファン達は、自ら担当するアイドルを中心に、「仲の良い関係」の網の目として事務所内のほかのアイドル同士との関係性をイメージしている点である。

のである。実際、インタビューにおいても、インフォーマントは個々のアイドルに惹かれるというより、グループ像に強い関心をもっていることが発言から伺える。

嵐が好きなんだ。仲がいい面をちゃんと伝わってくるから。仲がいい面があるから更に

好きになれる。[メンバーが脱退した経験を持つ：引用者註] KAT-TUNみたいになるのは悲しいと思うな、グループとして、メンバーは一人も欠かせないだろう。(番号⑤、グループB、二〇代後半、嵐、生田斗真担当)

上記の発言でも、アイドル同士の仲の良さを非常に重視しているが、そうした純粋な関係性の単位として、「メンバーは一人も欠かせない」と形容されるほど、グループが重視されている。とりわけ、その仲の良さの度合いがファンとして自分自身の応援意欲に影響するとまで謂われている点が注目される。このような純粋な関係性の単位として「グループ」や「ユニット」がジャニーズ・ファンにとって持っている重要性が、最も顕著に現れるのは、グループからの特定メンバーの脱退などが起きるときである。例えば、元NEWSのメンバーだった山下智久が、二〇一二年にグループから脱退し、ソロで活動することが公表された際、NEWSのファンから批判を受けて、シングルの売り上げまで落ちていた⁹。しかしながら、ここで

も、既に述べた「公」「私」の別が曖昧化した純粋な「関係性」のイメージが、ファンたちの解釈に影響していることがわかる。すなわち、「メンバー」や「ユニットの仲間」という公的な関係性が、分裂や脱退によりたとえ切断されたとしても、なおプライベートな仲の良さは切断されないと解釈する余地が生んでいるのである。例えば、元KAT-TUNメンバーの赤西仁が二〇一〇年にグループから脱退した際に、マスコミにグループメンバーの仲の悪さが原因の一つだと推測されたが、ファンである一人のインフォーマントはインタビューで、「六人」という赤西が脱退した前のグループ人数を繰り返して強調し、「赤西くんが脱退したときに、其々歩きたい道があるから、絶対仲が悪い訳がないっていって来て、それは信じたい。この『六人』の仲が悪い訳がないと思う」と述べている¹⁰。この発言から伺えるように、彼女達がグループの一体性に強くこだわることで、台湾のファン達は、ジャニーズ・アイドルを通じて、時が経っても変わらぬような純粋な「仲良しの構図」への欲求を示しているとも考えられる。

5. おわりに

本稿では、台湾における二〇代～三〇代女性ジャニーズ・ファンを研究対象として取り上げて分析し、台湾の女性ジャニーズ・ファンの間では、男性アイドル同士を媒介としてそこに仲良しの関係性が見いだされ、愛好されることを明らかにした。そこで、本稿の結びに当たって、前章までの検討を受けて、女性ファンにイ

メージされるジャニーズ・アイドル同士の関係性をもう一度整理し、男性アイドル同士の二重の友情構造を提示したい。

ファンに求められるジャニーズ・アイドル同士の二重の友情構造について、まず、「広い」関係性に注目する。ジャニーズ・ファンが、アイドルに対して想定する広い関係性とは、自

分が愛好するアイドルを中心に捉えたときの事務所規模での関係性である。そして、そこでファンによって望まれている「仲の良さ」には、ある種の機能性、目的が込められている。前述したが、「ジャニーズJr.」という長年の研修制度があったからこそ、ジャニーズ・アイドルは所属しているグループのメンバー達のみならず、先輩や同期、後輩とマスコミの前に一緒に登場する機会は非常に多い。また、グループインタビューにおいて、ファン達が「世話になる」、「仲が良いから共演してほしい」といった表現を用いていることもよく伺えるように、ファン達は、このような繋がりから様々なアイドル同士の相関図を想像し、アイドル同士の「仲の良さ」について語り合い、ファンとしての快楽を享受する。その上で、「公的」仕事の場面や「私的」プライベートの場面に求められるアイドル同士の「仲の良さ」には、実際、「共演」、「世話」などのかたちで、また担当するアイドルの仕事面に回帰してほしいという欲望も含まれていると言えよう。

次に、「深く狭い」関係性を見てみよう。この深く狭い関係性とは、特定のユニットやグループに所属することで生じた歴史的蓄積の感覚によって、アイドル同士の緊密な関係性である。そこでファンに欲求されている「仲の良さ」は、精神面の友愛と位置づけられている。前章でも検討してきたが、ファン達はグループの一体性を非常に重視し、グループメンバーの時に経っても変わらない関係性を求めている。さらに注目すべきなのは、このような特定なグループメンバーの間の変わらぬ関係性に、ファン達は単純に文面上の「仲よし」その意味を欲

求している点である。言い換えれば、グループインタビューにおいて筆者が度々耳にした「仲間」、「かけがえのない」などの言葉が示すように、彼女らは、ジャニーズ・アイドル、中でも特に自分が担当しているアイドルやその所属グループに、ほかのアイドル・グループとは異なる¹¹友情の素晴らしさを感じ取っており、それを確認することで理想的な友情像を構築しているともいえよう。

以上で確認してきたように、ジャニーズ・ファンがアイドル同士の関係性から「仲の良さ」を読み取る時、その視線は二つの方向に向けられている。一方では、担当するアイドルの「関係性の広がり」に注目し、時には事務所全体に広がるネットワークから、アイドルに有利な理想的関係性の構図を探索しようとする。他方では、自分の担当するアイドル・グループの内部の関係性にのみ、特別な仲の良さを読み取ろうとする。両者は一見正反対の方向性にも見えるが、現実には、両者が複雑に入り交じるかたちで、ファン達がアイドル同士の「仲の良さ=友情」を繰り返して発見し、確認していると考えられる。

このようにイメージされている友情のかたちは、ファンたちにとって、どのような意味を持っているのだろうか。本研究では、アイドル同士の関係性に「友情」というものを確認し、語ることによって、ファン達が、アイドルを媒介に「友情」に高い価値を与えていることを提示したい。

前述でも触れたが、今回調査したファン達にとって、一〇代前半からジャニーズJr.として露出しジャニーズ・アイドルは、ほぼ台湾社

会において初めてのアイドルだったが、彼女達も、その殆どが学生時代からファンになっていた。結果として、彼女達とアイドルたちのライフステージがほぼ重なり合うことになる。そのため、例えば、嵐を担当するグループAのインフォーマントが、「[嵐の櫻井：引用者註]翔くんが大学で勉強しながら仕事を頑張っている姿をみて、私もやる気がでる」と自らの心境を明らかにしたように、彼女達にとって、こういった長期間にわたる対応関係があるからこそ、強いリアリティを持って感じられるといえるだろう。また、グループEのインフォーマントは担当するKAT-TUNの亀梨和也とはほぼ同じ年である。彼女は、「亀梨くんから仕事へ対する姿勢を見習いたい」と述べたように、自分自身の「学生生活」、「職場生活」などの各ライフステージを、メディアを通じて目にするアイドルのライフステージと重ね合わせて、「指針」となるものを読み取り、自らのライフステージに適用しようとしている。すなわち、彼女達にとってジャニーズ・アイドルは、「他者」としてではなく、鏡として自らの理想を投

射しているものである。そこに、彼女達は、男性アイドル同士の関係性を取り上げ、長い期間をかけることで「理想」や「価値観」を投影していき、理想的な友情の構図を描くのも理解できない話ではないと考えられる。

なお、今回の研究で取り上げた台湾の二〇代～三〇代女性ジャニーズ・ファン達は、ジャニーズ・アイドルを媒介として理想的な友情関係の構図を投影するのに留まらず、アイドル同士に二重の友情関係の構造を読み取り、同型の友情構造を自らファン・コミュニティに再現・実演しようとしている可能性も秘めているのではないかと考えられる。この点について、今後は、社会空間の中に、経済的にも教養の面でも、比較的恵まれる未婚で有職の彼女達が構築しているファン・コミュニティ内部のファン・コミュニケーションに焦点を当て、彼女達はどのように濃密的に「ジャニーズ」という文化実践に自分のライフスタイルを重ね合わせて構築しているかを繊細的に考察していきたいと考えている。

註

- 1) ジャニーズ・ファンは最も応援するアイドルを「担当」と呼ぶ。「同担」というのは、同じアイドルを応援していることを意味する。
- 2) 辻の分析からは、ファン達は、「同担」を排除しようとするというより、ファン仲間内部の関係性を円滑に保つために、「禁止担」をあえて指定している。
- 3) この五つのグループ、十三名のジャニーズ・ファンのデーターについて、グループ①は嵐、グループ②はジャニーズJr.の生田斗真や嵐、グループ③と④は関ジャニ∞、グループ⑤はKAT-TUNや山下智久を「担当」している。このように「同担」の少人数の集結も台湾におけるジャニーズ・ファンの特徴となっている。
- 4) 毎日十万人以上が同時にオンラインで様々な話題について討論している。台湾で最も影響力を持つ掲示板といわれる。
- 5) 彼らは、外見のデザインからダンスの振り付けなど、「少年隊」をモデルにし、曲までカバーしていたが、空前の人気を博し、台湾のアイドルの先駆者的な存在となった。
- 6) 「小虎隊」のようないわば日本式の台湾人アイドルの流行も、視聴者の日本文化への憧れを刺激したと考えられる(李 2006)。
- 7) 未婚率の上昇と女性に提供される教育機会の拡大に関連していると示唆されている。なぜならば、台湾の婚姻関係には伝統的

- に、「内婚」や「男高女低」といった傾向がみられるからである。近年になって、女性の教育率が男性に上回るようになったため、期待される「男高女低」という婚姻関係が厳しい状況になったとされる(楊,李,陳 2006)。
- 8) 大学などの高等教育機関への女性の学位獲得率について、二〇〇六年頃に、台湾は五一%に対して、日本と韓国は四九%である(台湾教育部,2008)。また就業率に関して、年齢層を問わず、アジア諸国を比較してみれば、二〇〇九年の調査によれば、台湾女性の総体的就業率は五〇%で、日本と韓国の四九%より優れている(張 2012)。
- 9) 山下自身は、脱退以降のソロコンサートで自身の心境を下記のように語った:「やめたことで、NEWSのファンの中で、お前のことを怒って、ショックを受けて、嫌いになってしまった人もいると思う」。
- 10) 番号②、グループE、二〇代後半、KAT-TUN担当のインフォーマントの発言より。
- 11) 例えば前述に引用した「風のメンバーの仲がいい、KAT-TUNのようになったら悲しい」という表現のように、ファン達が自ら担当しているアイドル・グループの仲の良さは事務所内では最も良い方を示すために、他のグループと比較してしまう。

参考文献

- Carmen Renee Berry & Tamara Traeder(1995=1997) 『女160人、女友達を語る』 高田恵子訳 飛鳥新社
- Fabienne,Darling-wolf(2003) " Male Bonding and Female Pleasure:Refining Masculinity in Japanese Popular Cultural Texts" *POPULAR COMMUNICATION*,1(2)73-88
- Kazumi,Nagaike(2012) " Johnny' s Idols as Icons: Female Desires to Fantasize and Consume Male Idols Images" In Patrick W. Galbraith and Jason G. Karlin (eds.) *Idols and Celebrity in Japanese Media Culture* (Palgrave Macmillan), pp97-112
- 東園子(2007) 「女同士が見せる夢——ファンは『宝塚』をどう見ているか」 玉川博章等編 『それぞれのファン研究 I am a fan』 風塵社 pp203-241
- 東園子(2009) 「女性のホモソーシャルな欲望の行方——二次創作「やおい」についての考察」 大野道邦,小川伸彦編,『文化の社会学』 文理閣.
- 岩瀧功一(2001) 『トランスナショナル・ジャパン—アジアをつなぐポピュラー文化』 岩波書店
- 河津孝宏(2009) 『彼女たちのSex And The City 海外ドラマ視聴のエスノグラフィ』 せりか書房
- 高井昌吏(2009) 「「任侠映画」と『あしたのジョー』——「男らしさ」のメディア学」 高井昌吏,谷本奈穂編 『メディア文化を社会学する—歴史・ジェンダー・ナショナリティ—』 世界思想社
- 辻泉(2007) 「関係性の楽園/地獄——ジャニーズ系アイドルをめぐるファンたちのコミュニケーション」 玉川博章等編 『それぞれのファン研究 I am a fan』 風塵社 pp243-289
- 辻泉(2012) 「『観察者化』するファン—流動化社会への適応形態として: ネットが創る新しい社会」 『アド・スグディーズ』 40:28-33, http://www.yhmf.jp/pdf/activity/adstudies/vol_40_01_05.pdf accessed on August.12
- 龐惠潔(2010) 「ファン・コミュニティにおけるヒエラルキーの考察—台湾におけるジャニーズ・ファンを例に—」 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』 78:165-177
- 松本美香(2007) 『ジャニヲタ 女のケモノ道』 双葉社
- 李衣雲(2006) 『台湾における「日本」イメージの変化、1945-2003—「哈日」現象の展開について』 二〇〇六年度東京大学大学院人文社会系研究科博士論文
- 吉本直美(2011) 『宝塚ファンの社会学 スターは劇場の外で作られる』 青弓社
- 吉澤夏子(2012) 『「個人的なもの」と想像力』 勁草書房
- 張晉芬(2012) 「性別與勞動」 黃淑玲,游美惠編 『《第二版》性別向度與台灣社會』 巨流圖書公司
- 楊靜利,李大正,陳寬敏(2006) 「台灣傳統婚配空間的變化與婚姻行為之變遷」 『人口學刊』 33:1-32



陳 怡禎 (ちん・いてい)

[生年月] 1983年12月生まれ
[出身大学又は最終学歴] 東京大学大学院学際情報学府修士課程修了
[専攻領域] ファン研究・ジェンダー研究
[所属] 東京大学大学院学際情報学府博士課程
[所属学会] 日本社会学会、関東社会学会

Johnny's Idol Groups as Icon of Friendship: A case study on Johnny's female fans in Taiwan

ICHen Chen*

Abstract

This paper reviews the "Johnny's boom" in Taiwan and tend to explore that how female Johnny's fans get satisfied with friendship within Johnny's idols. Johnny's fans regard pure relationship between idols as important due to a system called Johnny's Jr. To this system, one group or unit will be created when its members were teenagers. In this study, an ideal relationship called friendship imaged by those Johnny's fans: Boys in Johnny's idol groups have to keep good relationship with each other since they are best friends rather than co-workers. And the "Kizuna"(Bonding) within Johnny's idol boys will be strong and unchangeable. Moreover, this paper shows a possible idea about that friendship within Johnny's idols might become the icon to offer female fans the blueprint for constructing pure and sincere friendship between their fan communities.

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

Key Words : Johnny's fans, Johnny's idols, friendship, female, Taiwan